

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

## 西湖畔（せいこはん）に生きる （草木人間 Dwelling by the West Lake）

2023 年 / 中国映画  
配給：ムヴィオラ、面白映画 / 118 分

2024（令和6）年8月7日鑑賞

オンライン試写

**Data** 2024-58

監督：顧曉剛（グー・シャオガン）  
出演：呉磊（ウー・レイ）／蔣勤勤（ジアン・チンチン）／陳建斌（チェン・ジエンビン）／王佳佳（ワン・ジアジア）／閔楠（イェン・ナン）／王宏偉（ワン・ホンウェイ）

### 👁️👁️ みどころ

杭州の西湖（せいこ）の美しさは群を抜いている。その周辺の山々には最高級の龍井（ロンジン）茶を生産する茶畑が広がり、その美しさも西湖との対比でより際立っている。すると、改革開放政策後の茶摘み労働者たちは、そんな美しさと豊かさを満喫！？そう思っていたが、アレレ、アレレ……。未だ定職に就けない一人息子と共に暮らしている茶摘み労働者の母親・苔花（タイホア）が、ある事件で茶畑を追放されてしまうと……。

日本に絵巻があれば、中国には山水画あり！本作は顧曉剛（グー・シャオガン）監督の“山水映画第2弾”だが、バスツアーへの参加を契機にタイホアが違法なマルチ商法の世界にのめり込んでいくので、その半狂乱の姿に注目！そんな母親を息子はどうやって救い出すの？

「杭州、西湖のほitori。仏教故事にインスパイアされた物語」をしっかり把握し、「人の世の悪さえ包み込む、驚嘆の《山水映画》第2弾！」の妙をしっかりと味わいたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■ 『春江水暖』の顧曉剛監督第2弾に注目！こりゃ必見！■□■

日本に絵巻があれば、中国には山水画あり！あなたは、黄公望の山水画・「富春山居図」を観たことは？ 毕赣（ビー・ガン）監督や胡波（フー・ポー）監督と同じ、1988～89年生まれの中国第8世代監督、顧曉剛（グー・シャオガン）の新たな才能は、それにインスピレーションを得て、杭州市の富陽を舞台に、市井の人々の営みを、山水画のようにスクリーン上に映し出した。

これは私が書いた、顧曉剛監督のデビュー作『春江水暖～しゅんこうすいだん』（19年）（『シネマ48』199頁）の「みどころ」の冒頭の一節だ。同作は約10分間にも及ぶ「横ス

クロール撮影」がお見事だったが、2023年10月の第36回東京国際映画祭で上映された同監督の第2弾たる本作も『西湖畔に生きる』という邦題を見れば、西湖＝山水画の世界が容易に想像できる。

その予想通り、本作のチラシには「山水画の世界を映画で極めたいー『春江水暖～しゅんこうすいだん』監督が挑んだ 人の世の悪さえ包み込む、驚嘆の《山水映画》第2弾！」の文字が躍り、最高峰の中国茶である龍井（ロンジン）茶の生産地として知られる西湖の美しい山々とそこに広がる広大な茶畑の写真が載っている。

そんな、グー・シャオガン監督の第2弾は「杭州、西湖のほitori。仏教古事にインスパイアされた物語」だそうだから、こりゃ必見！

## ■□■西湖畔の茶畑での仕事は？それを追放されると・・・？■□■

本作の舞台は西湖。主人公は、そのほitoriに暮らす母親の苔花（タイホア）（蔣勤勤/ジャン・チンチン）と息子の目蓮（ムーリエン）（呉磊/ウー・レイ）の2人だ。冒頭、山中にある美しい茶畑で茶摘みの仕事に従事しているタイホアの姿、タイホアの雇い主である老钱（ラオ・チエン）（陳建斌/チェン・ジェンビン）の姿が、そして共に働いている茶摘みの労働者たちの姿が映し出される。

本作の正確な時代背景は分からないが、「改革開放政策」が始まり、急速に経済成長を続けている現代中国であることは確かだ。しかし、日本でも有名な龍井（ロンジン）茶を大量に生産し、出荷しているラオ・チエンの職場は必ずしも豊かではないらしい。さらに、タイホアの息子のムーリエンも、容易に定職につき安定した収入を得ることができないようだから、夫を失った後1人で働き、ムーリエンを育ててきたタイホアの生活は大変そうだ。それでもタイホアは懸命にムーリエンの仕事先を探し、ムーリエンの結婚と将来の孫が住む家を購入するべく貯金を続けながら懸命に働いていた。ところが、ある日、“あること”をきっかけに、彼女は茶畑を追い出されてしまうことに・・・。

私はタイホアを演じるジャン・チンチンを本作ではじめて見たが、TVドラマ『清越坊の女たち～当家主母～』（原題：当家主母）（20年）に出演しているかなりの美人女優。といっても、ムーリエンの母親役だからそれなりの年齢だし、あくまで本作導入部では“ある男”との不倫関係（？）までかなり明確に描かれるから、一般的な意味での“いい母親”ではないようだ。そんな母親ながら、結婚前で定職につけない一人息子を心配する親心だけはしっかり持っていたから、母子の対話はそれなりに正常だ。しかし、そんな母親が茶畑から追放されてしまうと・・・？

## ■□■バスツアーの盛り上がりは？足裏シートビジネスは？■□■

西湖の茶畑を舞台にしたタイホアとムーリエンの紹介が一通り終わると、映画は一気に足裏シートビジネスを大展開している人物たちが主導するバスツアーの盛り上がりへ転化していくので、それに注目！

あなたは、日本でも通販で販売されている足裏シートを知ってる？何を隠そう、私はそ

の愛好者だ。足裏に貼って一晩眠った後シートを剥がすと、そこにはべったりと黒い排出物が付着しているから、そりゃ爽快！私はそう思って愛用しているが、本作に見る足裏シート販売は、いわゆるマルチ商法の違法ビジネスらしい。違法なマルチ商法は手を変え品を変えながら何十年も続いているが、万晴（王佳佳／ワン・ジアジア）や董万里（閔楠／イェン・ナン）らが主導している足裏シートの販売は、どこがマルチ商法でどこが違法なの？それは「バスツアー」で異様に盛り上がる風景を見ているだけではわからない。しかし、当初は半信半疑だったタイホアが次第に催眠術のようにその術作の中に取り込まれていったのも、本作を観ていると、なるほど、なるほど……。その勧誘のテクニックは、徹底した人間分析に基づく科学的なもの（？）だから、多くの人間がそれに騙され、巻き込まれていくのは当然だ。それは、日本でもマルチ商法以上にタチの悪い（？）新興宗教である統一教会に洗脳されて信者となり、合同結婚式まで挙げた歌手の桜田淳子や新体操の山崎浩子のケースをみればよくわかる。しかし、「山水映画第2弾」を諷い文句にした本作の前半が、なぜそんな半狂乱のマルチ商法のバスツアーの物語になっていくの？

## ■ ■ 「目連救母」とは？ ■ ■

チラシには、本作は「仏教古事にインスパイアされた物語」の見出しが躍り、「釈迦の十大弟子のひとり・目連が地獄に墮ちた母親を救う物語「目連救母」現代版。」と書かれている。しかし「目連救母」って一体ナニ？それを知っている日本人は少ないだろう。

私にとっては、お釈迦様に十大弟子がおり、目連はそのうちの一人だったということも、「神通第一」といわれる強力な神通力を持った目連が餓鬼道に墮ちた母親を救い、それがお盆の由来になったというエピソードも、全く知らなかったことだ。しかし、お盆の説話として「目連尊者の母」の話を知れば、「目連救母」のお話がよく理解できるらしい。

他方、私がネットで調べたところでは、日本仏教学院による『現代人の仏教教養講座』仏教ウェブ入門講座の「目連（モッガラナ）とは？」や、川田耕氏（京都先端科学大学教授）の『目連救母の精神史 —中国文明における母殺しの彼岸—』を読めば、「目連救母」のことがよくわかるので、興味のある人は是非。もっとも、本作はそんな“仏教故事”を知らなくても、まんまと万晴や董万里の口車に乗り、マルチ商法＝違法ビジネスの世界にのめり込んでいくタイホアと、それを必死に食い止めようとするムーリエンの姿が中盤のハイライトとなるので、「目連救母」の現代版はそれを見ているだけで十分理解できる。

そこで私が驚いたのは、茶畑を追い出され、悶え苦しんでいたタイホアが、足裏シートの違法ビジネスの世界にどっぷりと浸り、成功者になることを夢見て自信を深めていく姿が、突然華やかになるタイホアの化粧と服装で顕著に示されること。若い女が自信を持つことによって突然変身し、光り輝くように美しくなることはよくあるが、タイホアのように一人息子を抱えた中年のおばさんでも、「自分は成功者になる！」と腹を決め、自信を持ち始めると、その変身ぶりはすごい。もちろん、それは本人にとっては前向きな変化だが、母親がマルチ商法の違法ビジネスにどっぷり浸ってしまったと慌てふためく息子のムーリ

エンの狼狽は如何に？ちなみに、私は小さい頃に読んだ芥川龍之介の『杜子春』や『蜘蛛の糸』の怖さを今でもよく覚えているが、「目連救母」はそんな故事とも関連しているらしい。しかし、スクリーン上で展開する「目連救母」の現代版に見る、母子の対立の到達点は・・・？

## ■□■バタフライ社のマルチ商法の違法性は？■□■

導入部での山水画のような美しい西湖と茶畑の風景、そして2人の主人公の紹介を終えた後、本作は突然バタフライ社のツアー旅行の盛り上がりから、足裏シートの違法ビジネス＝マルチ商法をめぐる狂乱の大パーティー（集会）風景に移行していくので、ビックリ！バタフライ社では足裏シートを3セット購入すればいいだけで、どこかのマルチ商法のような“販売ノルマ”はないらしい。しかし、そんな説明がにわかには信じられないのは当然だから、勇気ある一人の男性が「これはマルチ商法だ！」と大声で異議を唱えたのは立派。ところが、そこは敵もさるもので、パーティー（集会）を仕切っていた司会者が「参加者はあくまで任意の意思で参加しているし、任意の意思で足裏シートの購入を決めている。」と理路整然（？）と反論すると、異議を唱えた勇気ある男性も結果的に退場してしまうことに。バタフライ社が掲げる最終目標は、トップに登りつめれば最高1,080万円（＝約2億円）が手に入るということだが、あんな風の大狂乱の中で群集心理が高まると、そんな非現実的な話が現実的な達成目標になり、それが自己変革の原動力になっていくから、すごい。その結果、バスツアーに参加する前のタイホアと、参加した後のタイホアはまるで別人になってしまうから、それに注目！

他方、本作の原題『草木人間』とはナニ？また英題の『Dwelling by the West Lake』とはナニ？映画祭のQ&Aでグー・シャオガン監督は「中国では『茶』の文字は『人在草木間』と言われると紹介していた」そうだ。「確かに『茶』には草冠の「艹」と木の「木」の間に人「亻」があると説明した」そうだから、はて・・・。また、「dwell」は「住む」の文学的表現で、「根付く」という意味もあるそうだから、英題をそのまま翻訳すれば、邦題の「西湖畔に生きる」になるらしいから、なるほど、なるほど・・・。このように、本作については、勉強すればするほど、話を聞けば聞くほど、含蓄に富んでいることがわかってくるからすごい。そして、そんな人間模様を浮かび上がらせることに大きく寄与するのが、ジアン・チンチン演じるタイホアの熱演だ。導入部でのバスツアーの盛り上がりはバタフライ社の幹部である万晴や董万里の演出によるものだが、息子の幸せのため、そして自分の幸せのために自分の意思で違法ビジネスの世界にのめり込んでいくタイホアの姿と、それを必死で食い止めようとするムーリエンの姿がさまざまな対峙シーンで登場するので、それに注目！さらに、そのシーンにおけるジアン・チンチンの狂気じみた熱演に注目！ここまで墮ちてしまった母親を救い出すのは、いくらムーリエンでも到底ムリ。誰でもそう思ったが、さて本作は・・・？

## ■□■警察の摘発は？1080万円の獲得者は？仲間割れは？■□■

タイホアを救い出すべく、自らバタフライ社の内部に潜り込んだムーリエンは、自分なりに集めた証拠を持って警察にタレ込んだが、警察の対応は？それは日本でも中国でも同じ。つまり、民事事件への介入を極力嫌がる警察は、ムーリエンのタレ込みや、ムーリエンが持参した証拠だけでは、バタフライ社を違法なマルチ商法の集団として摘発するのは難しい、というものだった。本作中盤から後半にかけて、一気にタイホアの化粧が濃くなり、服装が派手になっていくから、それにも注目！そんなタイホアが、それまで社会の底辺でもがきながら生きていくことを嘆いてばかりだった姿から一転して、自分に自信を持ち、未来を明るく作り替えていくビジョンを持つ姿へ転化していくストーリーとその映像は衝撃的だ。しかし、その実態は息子や孫のためにせっせと貯金していた金が、大量に購入した足裏シートに化けただけだから、アレレ、アレレ・・・。

それを知ったムーリエンが必死でタイホアの目を覚まさせようとしたのは当然だが、人間ここまで洗脳されてしまうと、それを止めるのは到底ムリだ。もっとも、バスツアーのガイドやパーティーの司会者として巧妙に集団心理を操り、大量の足裏シートの販売を成功させてきた万晴や董万里たち、バタフライ社の幹部たちが、最終目標の1080万円の獲得者を巡って対立し、仲間割れしていくラスト近くのシーンになると、アレレ、アレレ。やっぱり、バタフライ社はインチキだったの？そんな姿が急浮上してくるので、それに注目！

私はある映画鑑賞の中で、高層のマンション外で「モノ(人?)が落下していたのでは？」と感じた瞬間があったが、本作のラスト近くにもそれと同じように感じる瞬間が登場するので、それを見逃さないように。あえて、「ニュートンの法則」を持ち出すまでもなく、高層マンションで人間が上から下に落下すれば、そのスピードはかなりのものだから、落下の一瞬をカメラで捉えるのは難しい。しかし、人間はその一瞬を感じ取る能力があるようだ。しかし、本作にみるその一瞬とは？てなわけで、人的犠牲者(自殺者)まで発生させたバタフライ社の足裏シート販売を巡る違法マルチ商法は、ついに警察の摘発を受け、幹部は一斉に摘発されてしまったが、さてタイホアは？そしてムーリエンの「目連救母」は？

私は2024年6月16～20日、12年ぶりの上海旅行に出かけた。その第1の目的は伊知地拓郎監督×小川夏果プロデューサーコンビによるデビュー作、『郷 僕らの道しるべ』が上海国際映画祭にノミネートされ、上映されることになったためだ。『郷 僕らの道しるべ』はオーストラリアのARRI社の最高級カメラを使った撮影(の美しさ)が1つの“売り”だったが、それは本作の導入部も全く同じだ。もっとも、バスツアー以降それが一転し、バタフライ社による狂乱の世界が映し出される。しかしバタフライ社が一斉摘発された後、西湖畔の山を舞台とした幻想的な「目連救母」の物語になると、再度西湖の美しいカメラワークに転じていくので、それに注目！さあ、「目連救母」の現代版の結末は如何に？

2024(令和6)年8月15日記